



Title	詠吟の構成主義
Author(s)	土田, 耕督
Citation	a+a 美学研究. 2017, 10, p. 134-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90167
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

詠吟の構成主義

「我ハ歌ヨミニアラズ、歌ツクリナリ」。『千載集』『新古今集』の黄金時代に先立ってその礎を築いた、院政期歌壇の最重要人物である源俊賴は、自らを称してこう嘯いたという。その所以は、「風情ハツギニテ、エイモイハヌ詞ドモヲトリアツメテキリクム」ことにあった。

心情を四季の景物に託して表現するのが歌を「よむ」ことだとすれば、歌を「つくる」ことは^{エタラシク}表現^{シヨク}ではない。かといって、言語技巧を駆使した趣向に走るわけでもない。過去の歌の中から、魅力ある言の葉をカットアップしてリミックスすること。それは^{コンポジション}〈詩作〉を、音の配列としての^{コンポジション}〈作曲〉にかぎりなく近づける。

当時、和歌は歌会などにおいて詠吟されるものであった。フレーズの配合がメロディの質を左右するように、言葉の組み合わせ如何によって、一首の響きの優劣は決定づけられる。詠歌に「めづらしきふし」を追求した^{コンポザイ}〈歌作り〉俊賴はまた、筆筆に堪能な奏者でもあった。

土田耕督

